

「カメラマンにならないためのいくつかの方法」

(〇) はじめに

何だか、説教めいた本が売れている昨今。「葉っぱのフレディ」などはもう古典の部類で、近頃売れ筋なのは「チーズはどこへ消えた？」あたりだろうか。その他にももう数え切れない程の「説教本」が今、巷に出回っている。その効用はともかくとして、現代人が何らかの指針―大局的なものから些末なものまで―を渴望しているとみて間違いないだろう。大抵の情報はここ・インターネットに流れている現在、生き様やら暮らし方やらの明文化された情報まで人々は求めているかのようだ。もちろんWEBでそうしたことを探し求める人種もあるだろうが、概してそのような曖昧模糊とした事柄を説き明かす為には膨大な字数を要するため、やはり古典的な書籍という方法で流通させざるを得ないというのが正直なところなのだろう。まだまだWEBで長文を流して儲けられる、という時代ではないのだからして。

さて、その「説教本」のブームの最中であって、俺も何か書けないものかと近頃考えていた。こんな若造の説教が何の役に立つか、という当たり前の疑念はさておいて、あれこれ考えた中で出てきたのがこんなアイデアである。「カメラマンにならないためのいくつかの方法」……俺が経験してきた事の中で、皆さんに含蓄(?)をもって語れるのはやはりこの件についてだろうと思うし、カメラマンという職業は依然として若者のアコガレの職業だろうから、敢えてこの様な挑発的なタイトルの文章を書いてみたら面白いのではないかと思うのである。方法がいくつになるかは目下思案中。そういう訳で今週から漸次、このコーナーでは「カメラマンにならないためのいくつかの方法」を連載とさせていただきたいと思うので宜しくおつき合いの程を。かなり辛口になると思いますが、カメラマンの皆様、ご容赦の程を。俺が自分の半生の中で失敗してきた事を皮肉いっばいにつづって参りますゆえ……。

(一) 写真の専門家たれ

写真というのは大分大衆化された技術とはいえ、相変わらずプロとアマチュアの間には

大きな格差があるのが事実である。街頭を飾るポスター、新聞紙上の報道写真、そして雑誌のグラビア写真……。ただただシャッターを押せばきれいな写真が撮影できるというのはカメラ・フィルムメーカーが作り出した幻想に過ぎない。日本にはいくつかの写真の専攻を持つ大学があり、さらに数多くの専門学校があり、さらに写真サークル・クラブの類に至ってはもう無数の数が存在している。この事実はおかれに写真の奥深さを物語ってはいないだろうか。また写真に関する雑誌・書籍もまた無数にあるといつてよいだろう。一般の書店に並ぶ雑誌だけでも四〜五誌、その他に専門家向けの業界紙をも含めたら正確な数はすぐには分からない程だ。だからカメラマンを志す者はいきおいそうした類の学校に通い、そうした雑誌を熟読することになる。誰もがそうした知識の積み重ねがカメラマンへの道であると誰もが信じて疑わないし、何よりこの私こそ、まさにそうした人種の典型だったと言えるだろう。

写真の大学に通い、写真関係の雑誌にはほぼ目を通し、写真の技術から芸術論まで幅広い知識を身につけようとしていた俺は、写真を撮影することもさることながら、いかにカメラの種類を知っているか、あるいはどれだけ多くのフィルムを使ったことがあるかというような重箱の隅をつつくような行為にうつつをぬかし、その知識を誇るようになっていった。さらに都合の悪いことには、そうした人種の方が学校組織の中ではよい成績を修めるのである。写真の作品の優劣を数字で評価するのは誠に難しいのだが、写真の知識は容易に数量化が可能だ。だからそうした知識の虜になっている人間は学校でよい成績を修めてしまい、周りの仲間からも頼りにされてしまう。それによって快感を知ってしまったその手の人種はどんどん増長して、結局は写真の何たるかを知ることができないのだ。(誰がそれを知っているかという問題もあるが)そうした人種は実際の現場に出るカメラマンではなく、現像屋になったり、大学の講師になったり、運の良いものは写真スタジオに勤めたりするようになる。はたまた大金を払って買った大学卒という肩書きを行使することなく、全く写真以外の仕事で生計を立てる者も居る。

カメラマンになるまいと思う写真愛好家は、すべからず写真の事へのみ専念してれば間違いない。どんな会話の中にも写真のヒントになるような事柄を見つけたら飲び、己の目をファインダーと思って世の中を見れば良い。現に三年前の俺はそれを実践してカメラマンにならないという運命に導かれることとなったのだ。新宿、という地名を聴けばすぐにカメラ店を連想し、なぜ「ヨドバシカメラ」なのにカメラ以外の品の方

が多いのかと憤慨し、行楽地に行けば記念写真を撮る観光客のカメラ観察に余念なし。本屋に行けば写真関係の本以外には目もくれず、休日の夜は暗室三昧。そうした「研鑽」の結果、人はカメラマンという職業を己の身から遠ざけることが出来るのだ。

愛すれば愛するほど遠ざかってゆくもの。近頃はちよつと異性にしつこくすると「ストーカー」の烙印を押されてしまう時代だが、いくら好意を寄せていても相手に嫌われていてはどんなモーションも無意味なことは皆さんご承知だろう。その愛情がまだ小さいうちは諦めることもたやすいだろうが、あまりに身勝手な熱愛は人をしてストッキングに駆り立てる。これしかないのだ、という狭い見地、意地、と言い換えても差し支えなからう。これは自分の所望する目標を自ら遠ざけるものだと私は今になって実感する。好きなことをしたいと思うのは人間として当然の心理だが、好きなことは妥協を許さない。好きであればあるほどその事柄に対しての専門知識が欲しくなり、微塵もそれについて誤った事は聞きたくないのだ。

写真、という映像を扱う趣味・仕事において、これはこう、あれはあれという定石はまず存在しない。まあ純粹にそれを「お仕事」として見るならば様々な作法が存在し、そこから逸脱した写真はお代を頂戴できないということも多いのだが、あくまで写真というのは「嘘」であるし「虚構」であるし「価値を与えようとしなければ全く意味のない銀とゼラチン」なのだという事をわれわれは忘れてはならないだろう。つまり写真愛好家にとって、自分が自分を信じて培ってきた知識や技術を完全に無視させて、全く意味のないゼラチンゲルの中の銀粒子の配列を金に換えること、これが「カメラマンになる」という選択なのである。

(一) 写真の専門家たれ 第二回

ゼラチンゲルの中の銀粒子の配列―これを金に換えるのがカメラマンの仕事だと書いた。物書きは文字を（あるいは原稿用紙上のインクのしみを）金に換える職業だし、歌手というのはその声帯の振動がたまたま人心に心地よく聞こえるからその振動を金に換えて生業に出来る人たちだ。この世の中にあまねく存在する「クリエイティブな」職業とは結局、実体のないものを如何に価値があるように見せかけるかということ、ただそれだけなのである。その農業や生産業との決定的な違いは、その形のないものに値

段を付けなければならないというところにある。大根を掘ってきてこれを一五〇円で売る、イヤこれは少し高いよと言われても一二〇円で捌けばそれで済む話だ。もともと世間に相場があるモノを売る行為は確かに儲けは知れているだろうが、人間が古来行ってきた真つ当な商売の姿だけに間違いないのである。しかし、クリエイティブな芸の道は演歌にも歌われているように、「芸のためなら女房も泣かす」ヤクザな世界なのである。社員として雇われているカメラマンなどはごく少数で、その他は皆自由業、言い換えれば個人事業主ですなわち社長さんなのである。だから個人で営業活動をしなければならぬし、中には仲間のカメラマンと組んで事務所を設立する者もいる。なにしろ値段も相場もない、それでいて競合他社の多い業界を勝ち残ってゆくためにはどうしたらよいか？そのために私はカメラマンにならないためには写真の専門家たれ、と言うのである。すなわち、写真に専念していれば商売のセンスも磨かなくて済むし、写真のエッセンスとなる様々な知識も得なくて済むのである。カメラマンの世界で一流と呼ばれてしまう人たちは一概に博識だ。どのような分野の写真でもお客様に依頼されれば否応なしに撮らなければならないのがカメラマンという商売だから、自分の中に様々な引き出しを持っていなければならないからである。しかもそうした人々は案外写真の機材に頓着しないのが常だ。毎年毎年新機種が発表されるカメラの世界。AF（オートフォーカス）、AE（自動露出）が常識の世の中にあつて未だにニコンF3やキヤノンF1が愛用されるのは、彼らがいかに保守的で、カメラ自体にこだわりを持っていないかという事を物語っている。古い、マニュアルフォーカスのカメラを使うのがプロの誇り・こだわりだと我々アマチュアは思うものだが、それは実は違うのではないか。カメラメーカーもいかに撮影の生産性が向上するかということを目標に新機種を発表しつづけている。それを使うまでに操作を覚えるのが大変だ、という意見もあるのだが、これに乗らない手はどう考えてもない。多少の先行投資はあつても、結果として生産性が向上すればもとは取れるではないか。カメラメーカーとて売らんかな、という事だけ考えているわけではないだろうし。

ところで、カメラ自体への愛情をむきだしにしながらカメラマンになってしまう人間は極めて希だろう。有名などころで言えば田中長徳氏などが挙げられるだろうか。もう世にあまねく存在するカメラマニアの大統領といった趣のある氏。実は写真集もきちんと出されていることを皆さんはご存じだろうか？氏もれっきとしたカメラマンの一員な

のである。あそこまでえげつなくライカへの偏愛(?)を語り、被写体のためにではなくレンズのために写真を撮っているかのように見える姿勢が多くのアマチュアカメラマンを誤解の闇の中に陥れている彼の存在はもはや感動的ではある。いや、これは田中氏を中傷するつもりで書いている文章なのではないのだ。私は氏を、カメラマニアのままカメラマンになった天然記念物的存在として尊敬しているのである。そんな「ピュア」な心のままでカメラマンになってしまふカメラマニアは絶対どこかで大きな蹉跌にありと私は信じて疑わないから。それを証拠に、氏はどちらかと言えば物書きとして活躍しているではないか。裏を返せば、氏には「カメラマニア」という引き出ししかないということになる。それでもこれだけ活躍できているのだから、これはこれとして「芸」と認めざるを得ないだろう。しかし多くのカメラマニアに無用な幻想を与えはしないだろうかと私などは危惧してしまうのだ。

また、若者向けの写真雑誌の中にも、カメラマンにならないためのヒントが満ちている。

(一) 写真の専門家たれ 第三回

概してその種の写真雑誌には写真の機材がどうかと、このカメラのこの新機能を使うとどうなる、といった記事が多すぎるのだ。月例フォトコンテストのコーナーや、写真家の紹介の記事などもあるにはあるが、これらは「カメラマンにはならないで下さい」と言わんばかりの少なき加減である。カメラマンになろう、という選択もありなのだからそれを阻害するような雑誌の作り方は如何なものだろうか。カメラ・レンズ・フィルム……写真はこの三種の神器があれば写るといふことくらい我々アマチュアにも分かって切っていることなのにも拘わらず、その種の雑誌は手を変え品を変えて毎月同じシリーズになると類似した特集を組んでくる。そして、純粹な写真マニアの中学・高校生はほとんどカメラマンという道から逸れてゆく結果を生んでいるのだ。この文章は「どのようしたらカメラマンにならずに済むか」という事を論じている文章なのでそれはそれで良いのだが、もし本当にカメラマンを志す者がその様な雑誌を貪り読むような事があれば、それは厳に慎むべきだろう。それは前述した「引き出し」を自ら少なくとも持っている行為に他ならないからだ。本当にカメラを飯の種にしている人種は一年間購読しただけ

でそれらの雑誌とは縁を切るだろうから。本当に必要とする機材があれば自らカメラ店に足を運ぶのがプロカメラマンである。彼らはカメラメーカーの提灯記事など必要としない。それが本当に実用的か否か。判断基準はそれだけである。

だがしかし、写真を純粹にホビーとして楽しむのならば、それらの雑誌はよき伴侶となってくれるだろう。買うはずもない、買えるはずもない無数の写真機材たち。それらのインプレッション記事ばかりで占められているそうした雑誌は確実にカメラマニアの目を和ませてくれるからだ。幼稚園児が世界の国旗を全て覚えたなどといってテレビに出演しているのをたまに見かけるが、我々アマチュアが例えば、歴代ニコンを全て言えるというのもそれと同じような価値しかないのではないだろうか。(自分も同じ穴のムジナだということをご自分で明言しておく)世界の国旗を全て覚えたからといって何の価値があるだろうか?同様に歴代ニコンを全て言えたからといってそれがその人の価値をいくばくかでも引き上げることがあるだろうか?答えは当然、否である。しかし人々の中にはそうした事柄に心血を注ぐ者もある。それは何故だろうか。それは単に興味、この一語で片づける他ない。

趣味と実益、という言葉があるが、これは趣味と実益は確実に別物であるという事を端的に言い表してはいないだろうか。「偶然」に興味でお金を戴けて良かったね、という意味が言外に含まれていると私などは解釈しているのだが、これは写真の世界についても言えることなのである。世の中には、こう言つては語弊があるかもしれないが、「ごく普通の」「別段なりたいたいと思われない」職業が夥しくある。否、そうした職業の方が多いかもしれない。具体的に職種を挙げるのは憚られるので、既に皆さんの頭の中には幾つかの職業が浮かんできているだろうと信じて書き進めることにする。……さて、そうした「或る」職業にもし自分が就くと決まったとしよう。皆さんはどのようにその自分の立場を解釈・消化しようとするだろうか。私なら「生きてゆくために」「結婚生活を持するために」などと答えるだろう、多分。「何もしないと暇なので」と言いたところなのだが、残念ながら私の身内にはそんな資産家は居ないのだ。

閑話休題。そうして、どんなに自分なりの論をぶつてみても、多くの人々は働かねばならない境遇におかれる。自分が納得したか否かとは全く関係なく、物を食べれば財布が軽くなり、服を着替えても確実に手持ちの金は少なくなつてゆく。誰もが何もせずに金を手に入れたと思うのは当然だし、また腹を空かせたままでは生命の危機にさらさ

れる。この社会を生きる上で、誰かが誰かに使われないと金品の授受は発生しないのは自明の理だ。たとえ大会社の社長であっても業績が振るわなければ更迭されるし、大カメラマンであってもいい加減な仕事ばかりしては「干されて」しまう。どうしても誰かの思い通りに動かなければ金に入らないのだ。どんなに「偉い」人間であっても。どんな職業でも、自分の意志を多少は曲げなければ金にはならないのである。ポジティブに、「曲げる」ではなく「顧客サービスに徹する」と言い換えても良いだろうが、そうした事を「マニヤ」は嫌うのが常だ。

大体、偏った見方なのは承知の上だが、「物」をベースにした趣味は職業になりにくいのが常なのだと思う。またも語弊があるだろうが、例えば新聞配達の人には新聞マニアだろうか？それから八百屋の人は野菜マニアだろうか？物書きの人はペンマニアで、サッカー選手はボールマニアだろうか？言い方を換えれば、新聞配達人は新聞にいつも触れていたから新聞配達人になったのだろうか？サッカー選手はボール収集癖が高じて蹴ったりするようになるのだろうか？答えはどちらも否だろう。

この文章を読まれてるのは大概、カメラがお好きな人たちなのだろうと思う。そこで、敢えて言わせていただきたい。

カメラマンにならないという運命の糸を皆さんは確実にたぐり寄せていると。

(二) 学生時代から「現場」に近い職場に勤めよ 第一回

私はカメラマンとしての礎を築くべく、大学入学後間もなく何の疑いもなしに某出版社の某女性向け情報誌編集部にアルバイトとして入った。今思えばこれも何かの運命に導かれたとしか言いようのない、因果な出会いであった。「業(ごう)」という言葉を出さずには居られない、そんな出会い。

一九九四年四月、私はこのサイトで何度も述べているように日本大学芸術学部写真学科に入学した。大学生が入学にあたって初めて受ける洗礼・新歓コンパ。幾度かに分けて開催されたその催しの二度目であったか、その席で私は一級上の先輩にこう声を掛けられたのだった。「出版社でバイトしない？」

田舎者だった、そして世間を知らな過ぎた私は、そのオファーを二つ返事で承諾した。その席には数十名の同級生が居たのだが、私はそのオファーを聞き流す同級生の姿

勢を全く理解できなかったものだ。「何故、花の出版業界で勤めたいと思わないのだろうか？」と。……そうした連中は確かに今日、それなりにカメラマンとしての成功を収めつつあるようだ。私は今になって、彼らは大学入学前からカメラマンになる・ならないの勘所を知っていたのではなからうかと思う。目の前にぶら下がる出版業界への道筋をあえて避けるといふ英断。はからずも、私はその刹那にカメラマンにならない道を歩み始めたのだと思っている。

かくして月日は流れ、一九九四年の五月から私は週に数回、その編集部に通い始めることとなった。勤め始めた頃は毎日が新しい発見の連続で、プロカメラマンの流儀とはこんなものかと、門前の僧よろしく学び取ったつもりになっていた。リバーサルフィルムの撮影・現像、ストロボによるライティング、様々な商品撮影の方法……。花の東京でタクシーを乗り回し(勿論私一人で、ではなかったが)、芸能プロダクションや有名店舗のバックルームで広報担当のお姉さんにもてなされ、いろいろな所でようこそ撮影に来てくださったと言われる事に対しては当然、悪い気はしなかった。このように書いていると、地方の方が東京は怖いところだと言う意味を今になって少しだけ解した気になってくる。人間、一度良い待遇を受けてしまうと癖になる。何でも手に入り、何でも出来るような気にさせる街・東京。その刺激をどのようにこなすか出身地の差は無いと思うが、とにかく私にとっては刺激が強すぎたようだ。些細な話になるが、高校生の頃には爪に火を灯すような思いで使っていたフィルム。そのフィルム(しかも当然、カラーリバーサルフィルムだ。ご存じだろうが一本一〇〇円近くする)が目の前で湯水のように消費されてゆくさまも、私の心に深い感銘を与えたということも申し添えておこう。

そんな風にアルバイト生活を過ごし、時には生意気な事をして叱られ、また時には深夜に及ぶ撮影に立ち会って充実感を得、三年目くらいからは自分でも仕事(＝独立)が出来るかのように私は錯覚しはじめていた。

しかし、それが誤りなのであった。アシスタントはアシスタントにすぎないのである。しかも学生風情に任せられていた仕事は撮影自体には大して影響のない事ばかり。言い換えれば、失敗をして自分が食いはぐれるというリアルな実感が無いという部分が問題だったのだ。撮影の段取りは編集者なりライターなりがするし、確実にフィルムを装填して露出を確認してシャッターをリリースするのは他ならぬカメラマン自身だ。その職

業としての写真行為の本質的な部分にアシスタントが介入する余地は何ら無かった。確かに荷物を持つたりレフ板を持つたりするのも必要欠くべからざるアシスタントとしての職分ではあったが、考えてみて頂きたい。失敗をすれば自分が食えなくなる人間が人にその仕事の根幹を任せることが出来るだろうか？……答えは当然、否である。いかにカメラマン・アシスタント相互の信頼関係が出来ていたとしても、カメラマン先生はどこかでアシスタントを疑ってかからなければならぬ。もし、本当にアシスタントを疑っていないカメラマンがいたら是非お目にかかりたいものだ。その人は余程のアーティストか、はたまた……だと私は思う。疑われて当然。疑心暗鬼で丁度いいのである。

(二) 学生時代から「現場」に近い職場に勤めよ 第二回

しかし、である。疑われて当然と書いたが、そこは大人同士の「お仕事」の現場である。疑ってかかることに対しては何ら問題はないと私は信じるものだが、その猜疑心を顕わにする輩もまた居るものだ。これは最高級にたちが悪い。自分の失敗がそのアシスタントに由来すると言うことははっきり言って九割九分無いにも拘わらず、強迫観念的にアシスタントを追い込むタイプ。以前も何処かに書いたと思うのだが、ビジネスの現場に持ち込まれる私情はその現場を不要にウエットにしてしまう。横並びの関係ならばそれはそれで良いのだが、「体のいい」徒弟制度の中におけるウエットさは決して人情や温情を感じさせるものではない。考えてもみて戴きたい。アシスタント（徒弟制度における弟子）とは「おあずけ」を食っている犬であり、また目の前に人參をぶら下げられて走る馬のようなものである。すなわち、「憧れの職業に就かせてやるからとりあえず言うことを聞け」と言われている状態なのだ。そこにおいて、犬や馬と人間の立場が違うことは言わずもがなである。そういう職場において「犬」や「馬」を「憧れの職業に就かせる」ことは不文律であり、その大原則抜きにしてそのような職業に就こうという人間（馬同然かも知れないが）はまず居ない。あくまでカメラマンなる職業に就こうとして犬馬はその世界に飛び込んでくるのだから、使う側はそのような心づもりで扱わねばなるまい。すなわち、「純粹なる技術の伝授」と「就業先の斡旋」という二つの事柄が出来るだけ短期間に、そして要領を得た方法でアシスタントに提供されるのが最も円満で幸福な形態と言えるであろう。他の職業とは違い、アシスタント業とはあく

まで次の仕事があるという前提で雇用される職業なのだから、その職場になあなあのウエットさを蔓延させてはならないと私は思うのだ。一生勤めるような仕事ならウエットな付き合いも多少は必要になってくると思うが、アシスタント業は良い意味で腰掛けの仕事である。後腐れの無いようにサラッと飛び立てるのが良いと思うのだが。アシスタント本人は専門学校にでも通うつもりで、そして「師匠」（あくまでカギ括弧を付けることにする）は純粹な教員にでもなったつもりで後進の指導にあたる。これが理想だが、因習だらけの写真業界にそんな日は果たして来るだろうか。それともデジタル化が職人芸としての「写真」を駆逐するのが先だろうか？

未来の話はさておき、現代の実情としてカメラマンの中にはアシスタントを私事の補助に使ってみたり、その門地に立ち入ってみたり、自己の思い通りに動かないからと言って精神修養の為だか何だか知らないが数時間にもわたって恫喝してみたりということをする輩が多いことに対しては論を待たない。アシスタントをうまく使えないという中堅カメラマンの悩みもまた多く存在するものだ。だったら初めからアシスタントなどを使わない方が精神衛生上宜しいのではないかと私は何度も思ったものだが、丁稚奉公の身ゆえ何も言えず、確かに砂漠で荷物を運ぶ駱駝くらいの役には立っているものだからそれでもまあ良いかと思わされてしまったものである。何よりアシスタントを使っていると言うことがカメラマン自身のステイタスアップにもなることであるし。その点では私自身随分貢献したという自負がある。

アシスタントという職を経なければカメラマンという職には就けないという人がいる。そしてまた、アシスタントという職を経なくてもカメラマンになれるという人がいる。本稿ではアシスタントになったらカメラマンにはなれないという説を採るべきなのだが、この問題に関しては一概にそうとも言い切れない。確かにフリーランスが多いカメラマンという業界にあって、どのようにカメラマンになるべきかということを考えればアシスタントが最良の手段というような気もする。それではどのような人物に付き、どのような態度で勤めたらよいのだろうか？

この文章をどのような人が読んでいるのだから、私には皆目見当もつかない。あまり生々しいことを書くのも気が引けるのだが、私の経験をありのままに伝えることがこの稿の主旨だと思ふのでやはり書き進めてゆきたいと思う。親は選べないが、「師匠」にはまだ選ぶ余地があると思うからだ。それは「相性」という言葉で言い換えることも出来る

であろう。どんなに優れた「師匠」であつてもその弟子をうまく使いこなせなければ駄目なのであるし、また同時に弟子の浅はかさが「師匠」の素晴らしさを見抜けないということも起こるのである。それでは私見になるが、アシスタントの態度並びに良き「師匠」の条件について考えてゆきたいと思う。

(二) 学生時代から「現場」に近い職場に勤めよ 第二回

カメラマンにならないために、アシスタントになる。そのような愚行に出る方はまずあり得ないと思うのだが、もしかしたらカメラマンという目的抜きに、写真の業界とどのようなものか見てみようという奇特な御仁がいることを想定してこれから少し書いてみたい。すなわち、アシスタントにつきながらカメラマンにならないという贅沢な生き方への指針である。

多くのアシスタントは、如何に自分が早くカメラマンに成り上がれるか、という事ばかり考えているものだ。さもなくば、あのような息の詰まる師匠との二人きりの時間や現像の待ち時間の無為な時間を過ごせるはずがないのである。ところが、この視点を少し変えるだけでカメラマンにならない道は拓けるのである。それは、「アシスタント業をビジネスとして捉えるのではなく、二人の人間同士としてのウエットな付き合いに徹する」これである。私事の補助をし、家庭の愚痴まで聞き、自分の家庭の事まで洗いざらい話して一心同体になりければ「独立しよう」「独立したい」とは口が裂けても言えなくなるはずである。人間とは情にもろいものだ。師匠に対して「自分が居なくなったら困るだろうな」と考えてしまうのは世の常、当然の事なのである。しかし、それを断ち切る事が出来るか否かで、カメラマンへの道が決まるのだと私は思っている。いや、「自分が居なくなったら困るだろうな」などとは思わない読者の皆様が大半なのかも知れない。このようなことを平気で書ける私はやはりカメラマンにならないという運命を負った存在なのだろう。冷静に考えれば、月々一〇万円前後で不定休な仕事を与える人間に對して何らかの情を覚える事自体ナンセンスなのだ。師匠はあくまで踏み台として利用する―その大前提を崩した時、アシスタントはカメラマンにならない道を歩み始めることになるのだ。

また、そうしたウエットな関係を続ける事により、師匠の側でも独立させてやろうと

いう気持ちが無くなるという効果も見逃せないであろう。「こいつはいくら無茶を言っても付いてくる」と師匠が思ったとき、師匠側としてはこれ以上の逸材が見つかるだろうかという不安に駆られるのだと私は思う。はっきりと意志を持って誰かに入門しようというアシスタントは少ないのだ。その師匠がビッグネームでなければ尚更である。多くのアシスタントというのは専門学校や大学の掲示板に張り出されるビラや、そういった機関の職員によつて紹介されて来るのが常なのである。すなわち、師匠の側に見れば決して「自分のために」「自分を慕つて」来るものではないのである。だからこそ、しばらく使つてみて忍容性が良好だと認められた者は手放せなくなってしまうのだ。ほんの少しの面接で雇い入れ、無理難題を逃げ出さずに聞き、耐え忍ぶ人間が居なくなつたらどうするだろうか？次にまたそのような人間が見つかるという確証はどこにも無いのである。結果、この世の中には多くのアシスタントが長期にわたつて飼ひ殺しにされているのである。……考えてもみて頂きたい。頻繁にアシスタントが代わるカメラマンに對してクライアントはどのような印象を受けるだろうか？やはりそこに生じるのは「給料が少ないのだろうか？」「扱ひが手荒いのだろうか？」「クライアントには柔らく接しているが性根は荒い人なのではないか？」といった疑念であろう。その点からも、カメラマンはアシスタントを変えたがらないのだ。それでも長い年月を経て飼ひ殺しから脱するアシスタントは確かに存在するが、そうした御仁はすでに心の敏捷性を失ひ、師匠を超える事はまかりならない年齢に達している例が多い事については悲しい現実としか言いようがないのである。人間は歳を経るにしたがつて様々ながらみに着膨れてゆく。親は歳をとり、自らも一〇代の肉体を維持出来るわけではない。また結婚や出産も手枷足枷となつてわれわれの冒険を妨げる。そういつたしがらみが増えきつてしまった段階で独立をし、自らの仕事のスタンスを決めねばならないという事は新人カメラマンの獨創性を妨げる以外に何の役に立つだろうか。生活のために堅い仕事、堅い仕事(堅いというのは師匠のからみで確実に連載などの仕事が入ってくる、というくらいの意味である)と渡り歩き、結果として営業活動が疎かになつて食い詰める構図が見えてくるのは、単に私のひがみのなせる業なのだろうか？だからといってあまり奇抜な仕事ではかえつて食えなくなるのは明白であるし、痛し痒しである。このような事については私自身、数年前には随分考えたものだ。そして現在、その結果を出すまでもない境遇に陥つた事は幸福なのだろうか、それとも不幸なのだろうか……。

(二) 学生時代から「現場」に近い職場に勤めよ 第四回

さて、アシスタントの条件について考えた上で、今度は「師匠」側の条件について考えてみる事にしたい。私自身はカメラマンとして人を使う立場に立った事もないし、何人もの「師匠」に付いた事もないので浅い見でしか語れないのは承知の上なのだが、もし、まかり間違つてこれからそうした業界の仕事に従事する人のために、そしてその中で運命を決めねばならない人たちのために一言二言申し上げておきたいと思う。

……アシスタント業も仕事（正當に報酬を要求すべき仕事）のうちの一つだという事についてはもう諒解して頂けたらどうか。何度も言うようだが、どんな仕事でも金銭の授受が生じる以上は「ビジネス」なのである。カネでしか動かない人間を薄情と言わなれ。技術の修行なのだからこちらから金を払うくらいの気持ちでやれというのも間違っている。兎角、相場の見えないアシスタント業界なのだが、少ない中でもきちんと難癖を付けずに笑顔で払ってくれる「師匠」が一番である。何かと難をつけて金額を負けようとされたときには、自分の非はどこに有ったのかまず検証することは勿論だと思うがその次に、その師匠が本當に支払い能力が無い人なのか、あるいは単なる吝嗇（けち）なのかを冷静になって考えてみる必要があると思う。まあ何れにしても長くおつき合いが出来ない人だと言う事は自明であろう。その一万円か二万円を節約したがために若者の信頼を欠く。それが自分の収入には関係ないとは言え、まわりまわって自分の評価を下げるという事を理解できていない人種は確かに居るものである。

また、若すぎる「師匠」も、これは考え物であろう。年をとった学校の教師が円熟味を増し、はたまた若い教師が無気力に、あるいはヒステリックに生徒に接するように、人間を取り扱う事に関しては殊に年の功が重要な役割を演じるのだと私は考える。全ての人間に対して「若いから駄目だ」と決めつけるつもりは私には毛頭ないのであるが、経験から言つて年配者の「お説教」は的を射ている確率が高いように感じる。例え同じ内容について怒りを覚えたにしても、その内容を如何に咀嚼してアシスタントに語るかという点が違うのだ。私としては経験がないので例示できないのは残念なのだが、まあこの点に関しての異議は殆どないであろう。赤の他人が二人きりで仕事をすれば、そこに何らかの摩擦が生じるのは避けられないのだが、その思いを「師匠」が「師匠」たる

立場を笠に高圧的に押しつけるのはたやすい事だ。しかし、たやすい方法で作られたものには後で必ず襤褸ぼろが出る。木材を接着するときに、接着剤で着けるか釘を打ち込むか、はたまたタボを切つてそこに嵌め込むか、どれが最も耐久性があるかを想像してみても戴きたい。手間を掛けられ、どのような心理機制で物事が納得されるかを知っているのはやはり先輩の方である。これはもはや理屈ではない。また同様に、子供は居ないより居た方がより良いとも言えよう。諸事情があつて子供が出来ない家庭もあり、その点を責めるのは適切でないと承知はしているのだが、やはり子育ての経験は後進者の育成にも役立つのだと私は信じる。年若い他人の子供を会社の社長でもないのに使う事。少なくとも、アシスタントを活用する能力については「有子V妻帯V独身」という図式が成り立つのは間違ひなからう。

相性、という言葉がある。どんな仕事でも始めるまで勝手が分からないという事実もある。この他にもあげつらえばきりのない「師匠」の条件がある。私が今のところ感情的な部分を抜きにして語れるのは上記の二点についてだが、後は各人の好みに応じて誰の弟子になるかを考えて戴く他ない。無責任な言い方になるが。しかしこれだけは忘れずにいて戴きたい。「親は選べないが師匠は選べる。師匠は彼一人ではない。」

この項の締めくくりとして、労働基準法の第六九条をここに掲げておくことにしよう。「使用者は、徒弟、見習、養成工その他名称の如何を問わず、技能の習得を目的とする者であることを理由として、労働者を酷使してはならない。」

(三) 実家を出よ、職場は都内だ。

写真という、漠とした方法で糧を得ようとするときに、まず必要なのは生活の基盤である。矛盾した物言いだと思われる方もあるかもしれないが、まずは読み進めてみて戴きたい。写真を生活の基盤にしようとしているのに、まずその前に生活の基盤が必要だというのは確かに奇妙な話だ。しかし、数多い、しかも年若きカメラマン志望者の中には大まかに分けて二種類の境遇があるということをご確認ください。それは、「実家に住んでいるか否か」という点についてである。

実家にいるという事―それは家賃からの解放を意味し、食い詰めても最低限の食事は出来ると言う事を意味している。全ての人間の親が健在であるということはまずあり

得ないのだが、親が健在でないにしても自分の生家に住まわっているという事はカメラマンになるかならないかの大きい分水嶺になるのだと私は思っている。勿論、実家に住んでいる方がカメラマンの道により近いというのが私の結論だ。何をどう言い換えてもこれは私の負け惜しみになってしまふのだが、アシスタント時代の薄給に耐えるには実家に居る方が絶対的に有利であるし、カメラマン側としてもアシスタント雇入れの際には実家にいる事を条件にしている者が多い。それも当然であろう。カメラマンの仕事の殆どは東京都内にあり、その家賃の高い土地でアシスタントが暮らすための部屋の家賃としては月に最低五万円は見なければならぬ。中堅クラスのフリーカメラマンが給与として支払うのが月一〇万円として残りは五万円弱。そこから食費や光熱費を差し引いたら貯金など望むべくもないわけだ。(仕送りなどを受けていない、という前提でこの文章は書かれている。) ここにおいて一人暮らしのカメラマン志望者が直面する一つの大きな壁が出現する。それは即ち、「自分の修練の為にフィルム代が出ず、独立するための機材を予め揃えておく事も出来ない」という厳然たる事実だ。住み込みのスタジオマンや、社員カメラマンならともかくフリーカメラマンを目指す者にとってこれはまさに死活問題だ。この状態を漫然と続けて行く事によってアシスタントの一部は餓い殺しにされ、はたまた目標を見失ってドロップアウトして行かざるを得なくなるのだ。兎角世間を知らない「夢だけで食べて行ける」的な美談を信じ込みがちなのだが、あまり長すぎる夢は陳腐化する。アメリカなどでは「アシスタント専業」という立場がきちんと確立されており、アシスタントの組合なども設立されているそうだが、ここは日本。アシスタントは目的地ではないのだ。しかも高価な機材を持っていないと始まらないのがカメラマンという商売である。もし、これをお読みになっている方の中に現在一人暮らしでアシスタント稼業をなさっている方が居られたら、直ちに実家に帰るなり、深夜のアルバイトを始めるなりして――親が許すなら親に買わせてもこの際いだらう――下克上の為の機材一式を揃えておく事を強くお勧めする。イバリの効くカメラを持って世間に出ないと、結局再びレフ板を持たされる羽目になるから。今の「師匠」と良い関係を持ち、機材を借りられるような円満な辞め方を画策しておくのも良いだろう。

いかなる美辞麗句で飾り立てても結局必要なのは金と暇である。実家が貧しかったという歌手や俳優や作家などの話は多く聞くが、実家が中流以下のカメラマンというのはかなりレアではないかと思う。どう転んでも数十万円の機材(中判・大判も必要だと

れば百万円コースだ)を要し、それを揃えても次には感材(フィルム・印画紙などの事)の費用が自動的にかかってくるカメラという憎らしい存在を御しきれるのは財力をおいて他にない。この点についてのご意見は無用である。こればかりは誰もが言いたくても堂々と言えなかつた真理なのだから。古今東西の著名なカメラマンの経歴を見てみると、どの家も商売を営んでいたり、資産家だったりするのは決して偶然ではないわけだ。

だから、自分の生家が中流以下だと自認するカメラマン志望者はくれぐれも実家から離れない事だ。実家から離れても苦勞しないだろう、と思う人はその時点ですでに中流以上なのだからこの際は論外である。努力で財力をカバーできると信じるのもよし。しかし最終的に貧乏人の勝負は厳しい。私こと貧乏人の失敗談を解釈するのは読者の皆様ご自身の心一つである。カメラマンになるもならないもまた然り。だが、カメラマンにならないための方法としては、どんなに出でいって、好きなところに住むのが良いのだというのが本稿の目的。

(四) 二つの人種 第一回

元来、「他人は他人」とたやすく思えてしまふ性質の私は世間の流行を追うこともなく、また同業者の動向も積極的には知ろうとせず、「独立独立歩の気概」をもって写真愛好家―セミプロまでの道筋を歩んできた。この点は私がカメラマンにならなかつた最大の理由なのだと思う。初めの方に書いた話とも関連するのだが、こういう性質は人間の「引き出し」を少なくさせてしまふ。自分が良ければそれで良い、というスタンズでは仕事はおろか、銭などは到底貰うことが出来ないということについてはこれまでに述べてきたのであるが、この項ではその事について少し違う観点から述べてみたい。

写真学校に集い、そして中学・高校の写真部に集う人々。その中に二種類の人種が居るといふ事に気づいたのは私が大学に入って直後の事だからもう七年も前の話になる。同じ写真を目的とし、親しく会話をする人々を瞬時に峻別する方法が実は存在するのだ。それは――ずばり、服装のセンスにおいてである。何がどう、とはなかなか筆舌では表現しにくいのであるが、「A群」と「B群」という風にはつきり分けられるという事にまず異論はないはずである。その判別に際してその服たちがどこで買われたかとか、あるいはどこのブランドの物であるかという事は全く関係ない。ただのTシャツに、ジ―

ンズを穿いただけの姿でもいい。安いスニーカーに、ユニクロのフリース姿でもいい。しかし、そうした種々の気取らない服装の中にも「A群」「B群」の二種類が存在してしまうということについては読者の皆様も薄々感づいておられることであろう。「A群」「B群」を、おしゃれか否かという言葉で言い換えても良いのだが、この論では敢えておしゃれという言葉は使わないことにしたい。おしゃれという概念にはマスコミのバイアスがかかり過ぎていると思うからだ。

さて、それではその各群に属する人たちがどのような性質を持っているか、これは大いなる私見であり客観性はまるでないのであるが書き進めてゆきたい。どちらがより良いとか、望ましいとかという話ではないのでまずは字面だけを追って戴きたい。服装による判別法によって導き出されるものに限らず、写真関連の学校やグループには下の二種の人種が居るのだという話である。

「A群」

- ・ 価格ではなく自分の意志で選んだ服や小物を身につける
- ・ 流行りのモノを集めたがる
- ・ スポーツ・芸能ニュースに詳しい
- ・ 外向的
- ・ カメラは純粋に道具だと考える
- ・ まず写真の仕上りをイメージして撮影にとりかかる そしてそれに付随する機材は何かと考える
- ・ 写真以外の趣味が豊富

「B群」

- ・ 衣類は必要に迫られて購入する
- ・ 流行りのモノにはあえて背を向けやすい
- ・ スポーツ・芸能ニュースに明るくない
- ・ 内省的
- ・ カメラ収集傾向がある
- ・ まず望む機材を入手し、それを手に入れてはじめて新しい表現を考え出す

・ 写真以外の趣味が少ない

これをお読みになって、「B群」はあからさまにマイナス要素が多いではないかと思われる方が殆どだと思うが、私はまさに「B群」だったことをここに明言しておく。お怒りにならずに読み進めて戴きたい。写真関連の学校やグループに限らず、この二つの人種には反目しあい、また時には相哀れみながら共存しているのであるが、それぞれの人種はそれぞれの立場で満足感を得ているから互いに越境しようとはしないのが常である。各人に与えられたある一定の財力やセンスをどのような配分で使っているかの違いでしかないから満足感皆同じであるということを確認しておきたい。そして一見、写真により注力しているように見えるのは「B群」であることもここで確認しておくことにしよう。

(四) 二つの人種 第二回

写真の、写真による、写真の為の生活―これを以て最良とする価値観を持つのがB群の人々の特徴である。趣味は写真で、職業も写真だったらこれ以上の幸福はないと考える人々だ。その目標の実現に注力しすぎる結果、B群の人々の多くは写真・及びその資機材以外に資力も興味も分配することが出来ず、若者らしい趣味も格好も出来なくなるのが常である。若者らしい趣味とはこれまた曖昧な語を使ってしまったものだが、これは例えば旅行であったり、自動車であったり、あるいは被服の購入や流行の各種店舗での購買活動、というくらいの意味合いである。要するに写真以外の通俗な、マスコミに報道される頻度の高い趣味だと言うことで同意して戴きたい。そうした日々を送るうちに、B群の人々は確実に世間から「取り残されて」ゆく。自覚していようがしてまいが、彼らの世間話におけるトピックスなボキャブラリーは少なくなっているし(勿論同じ人種相互の会話は問題なく成立する)、服装を見ても若い世代の「モテたい」という自然な欲求をわざわざストイックに押し殺しているかのような印象を与えてしまいがちなものになってゆくのだ。この純粋な感情から発生する写真への注力ぶりが、後述するようにB群が渴望する「趣味は写真で、職業も写真だったら」という理想を遠ざけているという現実を説くにあたって私は得も言われぬ寂寥感を覚える。私はこの一連の

連載の最初の辺りで「愛すれば愛するほど遠ざかってゆくもの」という表現を用いたが、本当に写真「のみ」を愛している人であればあるほど、その愛に報われにくいという現実には、人間の死を前提とした宗教への信仰の如き因果さを私に感じさせずにはおかない。

一方、A群の人々というのは写真を二の次にしているとB群の人々からは思われがちである。先に箇条書きで述べた特徴はどうしてもB群からしてみれば「不真面目」としか映らないのは不幸な事である。同時にA群の人々の作品と、B群の人々の作品を見比べた際に有意にA群の作品の方が被写体が多彩で興味をそそるものが多いという事もB群にとっての不幸と言えよう。暗室に籠もる事が多く、余暇もカメラの物色や写真関係の書籍の閲覧に費やす機会の多いB群の人々にとって様々な被写体との邂逅の機会が少なくなるのは自明の理なのではあるが、この事実の原因にA群の人々もB群の人々も未

来永劫に亘って気付かないであろうと私は悲観的感情をもって信じている。

さて、もう結論は述べてしまったようなものではあるが、改めて明言すれば、明らかにA群の人々の方がカメラマンになる資質やチャンスが大きいと言える。先に箇条書きにした要素はすべて彼らの写真の上での成功に寄与することばかりであるからである。写真はサロンの為のものではない。写真愛好家やプロカメラマンの間だけで通用する写真は我々の物理的な空腹を満たすものでは決してあり得ない。広く一般の、写真を自ら撮らない人々の役に立ち、あるいは目の幸福になるものでなければ商売にはならないのである。カメラマンに仕事を与えるクライアント(出版社・新聞社・広告代理店等の人々)に営業をかけ、プレゼンテーションを行う段になって初めてB群の人々は苦汁を嘗めることになるのである。そうした、カメラマンに仕事を与える人々は一様に一流大学卒でそれなりの給与を貰い、中流以上の綺麗な生活をしている人たちだ。そこではカメラマン志望者も彼らと同じ組上に乗せられ、人間性から評価されてしまう。彼らクライアントにとってカメラマンとは要求する写真を確実に撮ってくれさえすれば良いわけだから、どんなに気取ったポートフォリオ(プレゼンテーション)に使用する作品のファイル)もはつきり言って大した役には立たない。そのカメラマン志望者がどんな身なりで、いかに多数の「引き出し」を持っていて、かつ主観的で観念的な写真の注文というものに対してどれだけクライアントのイメージに近いものを提示できるかということだけがカメラマンの条件として求められるのである。「作品撮り」は大切なことであるとは思

れよりも心配すべくは、そのプレゼンテーションの場で、もしスポーツの話が出来なかつたら……或いは流行の店に行つたことがないという事を告げねばならなくなつたら……という事である。B群の人々は、その期に及んでもっと写真以外の遊びをしておけばよかつたと思つてに相違ないのである。

だから、カメラマンになろうと欲する者はA要素を意識して生活するべきだし、逆であればB要素を生かして生活しておけば間違いない。但し、ここにおいて忘れてはならないのは、人生における幸福の量は何をしても大差ないという事だ。

(五) 生き様としての、ハッター

私は常々、人生にはある一定の「幸福の幅」のようなものがあつて、その中にある様々な幸福の要素を高めるか低めるか、それが他人に与える印象を左右しているという気がしている。ある要素を高めてゆけば相対的に他の要素が下がってゆき、逆もまた真なりで、結果として各要素の平均値は誰しも一緒なのだという考え方である。平たく言えば、大富豪やら芸能人の家庭生活が実は不幸なことが多いとか、あるいは慎ましいながらも愛に満ちた生活を送っている人々の方が実は幸福なのだという美談とか、すなわち何らかの点で飛び抜けて幸福な状況になれば他の要素の幸福度は減つてしまうという考え方だ。そして悲しいことだが、その外見に表れる幸福の要素がリッチなものであればあるほど、その人の社会的信頼度、好印象度は上昇してゆく。

ここにおいて「印象」という言葉を用いたが、これは先述したようにカメラマンになるにあつて必ず重視される事柄である。要するに自分の見た目を磨くこと、あるいは自動車や住宅に高級な物を奢ること……。これらに何らの疑念も感じずに邁進し幸福を感じ、そして他の種々の幸福の要素を減じてまでもクライアントたるブチブル(中流)階層に同化してゆく事こそがカメラマンになるための幸福の使いどころなのだ。多くのカメラマニアや写真愛好家はプロカメラマンのこうした「ハッター」の部分を理解されていないように思う。カメラマンが東京都内に住み、小さくても外国車に乗りたがり、横文字言葉で話したがるのは何故なのか?その答えは「ハッター」、言葉は悪いがこの一語に集約されてゆくのだと考える。しかし、多くのカメラマンはこれはハッターではないと断言することだろう。我々一般人にしてみれば、家賃の高い都心の部屋に住むこ

とや壊れやすい中古の外国車に乗ること、また維持費の高い外国産大判カメラを使う

ことはいかにも非合理的で無駄なことに見える。そしてそれはある種の幸福を自ら逃しているように見える。しかし、それらの投資を彼らは決して無駄だとは思っていない。

むしろ業界の不文律、常識として理解しているのだ。個性が重視される（と思われている）

）そうした業界にあってもそうした横並び意識はまだ根深い。また、クライアン

ト側でもそうした「モノ」に騙されがちだという事も悲しい事だ。北欧生まれの例の金

属製六×六判カメラを使っているだけでクライアントが安心するというのはしばしば聞

かれるエピソードである。……話が若干逸れたが、つまりこういう事である。カメラマ

ンになる人々というのは、たまたま自分の望む幸福のポイントがクライアント受けする

ものだった、と。だから一般人にしてみればハタタリに見える事でも、本人たちにして

みればごく自然な生き様なのだ、と。

そう言つては身も蓋もないと読者の皆様は思われるかも知れない。自分だつて撮影に

必要な機材には随分な金をかけ、それなりにリッチに見えるぞという方も多いただろう。

しかしそれにはまだ何かが不足しているのだと思う。もし、今書いたような台詞（「自

分だつて……」）が心の中にあるという皆様は、その生き様としての自然なハタタリを

まだ実践出来ていないと言ふ事なのだ。意識して金を使っているうちはまだまだ真の

ハタタリスト（？）ではない。意識をしているということはまだそのカメラマンの流儀

における金遣いに疑念を持っているということだと私などは思うのだが、如何だろうか。

ともかく金だけはいくら持つていても損はしない、カメラマン業界というのはそういう

世界であつた。

……「カメラマンにならないための方法」という主題を持ったこの連載に、あまり運

命や宿命めいたことを書くのは気が引けたのであるが、単なるカメラ好きで他の物に金

を使えないということではプロとして通用しないのだという事実をお伝えしたくてこの

項を設けてみた。物欲の対象としてのカメラから、自分自身を飾るためのカメラへ。蒐

集の対象としてのカメラから、クライアントに見せるためのカメラへ。この文章の読者

のアマチュアカメラマンの皆様がもしプロカメラマンになる事をお望みならば、この生

き様としてのハタタリとは何かと言ふ事を是非私と一緒に考えて戴きたい。意識して出

来る事ではないにしても、これをおぼろげにでも理解した暁にはカメラマンになる、な

らないという二つの運命がある程度は自分で操作する事が出来るようになると思うから

だ。

(五) 生き様としての、ハタタリ 第二回

今のご時世、いくらフリーターが幅を利かしているとは言え、まだまだ日本人の価値

観の中から終身雇用への希望や会社への帰属意識は拭い去れていないと私は思ってい

る。現在の仕事の中で、私は祖父といつてもおかしくない年代の人たちと世間話をする

機会が多いのだが、彼らの話題としては最近の若者に対する愚痴がやはり多い。そんな

中で、先日聞いて印象的だった言葉にこのようなものがあつた。「三年勤めて辞めなけ

れば本物だ」……この言葉に、かつてあのヤクザな業界（何の事は言わずもがなであ

ろう）に籍を置こうとしていた私は愕然とした。やはり世間一般の価値観においては終

身雇用が至上ということになっていて、特に熟年層の人々は一つの会社に一生勤められ

る男こそ一人前だと考えているのだ……。「一年なんかじゃ全然駄目。二年勤めても

まだわからないね。」……そうですか、それではカメラマンアシスタントはおろか、カ

メラマンなんか全然駄目ですね……という言葉を私は喉元で押さえつけたのだが、胸

の奥ではその言葉に納得しないでもないもう一人の私が居る事に恥じらいを覚えてい

た。これがすなわち、生き様としてのハタタリを実践できているか否かの試金石の一つ

の例なのだと思う。恐らく何のしがらみも感ずることなくカメラマンになれる人々はこ

うした言葉に触れても何の良心の呵責も感じないだろうから。このように年長者に言わ

れるまでもなく、我々は（特に私は会社員の倅だから）子供の頃から漠然と、何処かの

会社に入って少しは出世して、子供も二人くらいもうけて住宅ローンに苦しむのだろう

な、という人生のビジョンを持たされてしまっている。そして世間に夥しく居る子の親

たちはまず八割方はサラリーマンなので、親の背中を見て育つ式にその子供たちも半自

動的にサラリーマンになってゆく。植木等が「サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだ」

と唄った時代はもはや遠くへと去ってしまったけれど、サラリーマンには間違いなく固

定給がある。そしてボーナスがある。その生活の安寧を自ら壊して自由業、殊に歌手や

ら画家、そしてカメラマンになろうとするサラリーマンの子たちをサラリーマンたる親

たちは当然止めようとする。その親たちはかつて自分が夢見たことをすっかり忘れたふ

りをして子供たちを説き伏せにかかるのだ。そしてそうした懐柔策に屈する子供と屈し

ない子供の二種類が現れてくるのは自然な事だが、その中で屈しない方がカメラマンへの道を歩き出すことになるのは皆様お分かりであろう。

書き進めながら、再び運命・宿命論になっている事を私は反省している。上の懐柔策に屈するも屈しないも、所詮はその本人の性質次第ではないか。だが、こういう風には言えるだろう。とにかく世間の価値観の逆を行け。反対されればされるほど目的には近づいている。そうした生活を実践し、それに違和感を感じなくなったときには本稿が要求するところの「ハッターリスト」に近づけたのではないか、あるいは性質自体を変化させられたと言えるのではないかと。勿論このハッターは、カメラマンになろうとするならばカメラマン的なものでなければならぬ。その辺りはまさにアシスタントとなって習得してゆくしかないのかも知れない。天性のそれが自分にないと自覚するのならば。

それではそのカメラマンになるに相応しいハッターとはいかなる種類のものであろうか。まあこの章の最初にも少し例示してあるので大体こんな所かな、と読者の皆様は思われていると思うが、まさにその程度のことである、と私の浅知恵は言う。繰り返しになるが、クライアントたるプチブルに如何に近づくか、そして自分の写真は他の同業者と違って優れていると自ら信じ込み、またクライアントに信じ込ませるか、また出来るだけ派手にライトを使い、小難しそうなカメラで撮影を行うか……。

カメラマンとは何の資格が無くとも開業できる商売である。誰でも名刺を作り、そこに「カメラマン」或いは「フォトグラファー」と書き込めばめでたくカメラマンの一下上がりだ。しかしそのようなわかカメラマンはいくらでも、それこそ星の数ほど居る。そのような名刺を作ってしまう事自体がハッターそのものなのだから、その中でいかに恥じらい、疑うことなくハッターを押し通せるか。それこそがカメラマンとしての成功への鍵であり、生き様としてのハッターが試される場でもある。そのハッターがまだ生き様として確立していない者は途中で恥じらいを感じたり、カタイ職業に憧れたりして、結果としてカメラマンとしての成功を取める事は出来ないのだ。

随分観念的な話に終始してしまったが、カメラマンになろうと欲する方には十分な理由を、なるまいと思う方には円満な諦観を差し上げられますように。

(六) いい人のなり損ないがカメラマン

この表題は、私が高校生の頃に読んだ一書名は忘れてしまったが、カメラマンになるための指南書の中にあつたものからそのまま拝借したものである。お気づきの方があれば、あるいは著者の方ももしこれをお読みになったら素直に陳謝したい。しかしこの五七調の語呂の良さといい、言っている事の鋭さといい、この言葉は私の脳裏の中で一定の座をこの一〇年近く占めているのだ。だから私は敢えてこの一節を引用させて戴きたいと思う。

さて、その「いい人」とはどのような人の事を指すのであろうか。曖昧な概念なのであるが、読者の皆様の中には既に一定のイメージが出来上がっているだろうと思う。それは恐らく、「お人好し」——この稿の中では、少し気の弱い、我を發揮できないそんな「お人好し」——「いい人」として話を進めさせていたことにはしたい。いい人、と言っただけでは何か消化不良だと思ふからだ。例えば我が強く、自分の言いたい事をはっきりと表明できる人が老人に席を譲ったりするのを見てそれをお人好し、と言えるだろう。それは単に勇氣ある、気持ちのいい人間と呼ばれるべきだろう。それではこの稿が語ろうとするいい人像とずれてしまうので、これ以降は「いい人」を「お人好し」と言い換えて書き進めることとしたい。

そんなお人好しを自認する人は恐らくかなりの数に上るのではないかと思う。私自身も含め、殆どの人間は「こんなに人の役に立っている」「こんなに人の面倒を見ている」と思い込んでいるものだ。はたから見れば何故この人がお人好しだと自ら言えるのか信じられないような人までもがお人好しを主張してやまない。かほどさようにお人好しである事、ひいてはお人好的な立ち居振る舞いは人間関係を円滑に進める上では大切な事なのだ。しかし謙遜の意味で自分がお人好しであると言うのは寂しい事だと私は思う。痩せているのにまだ太っていると言ひ張る婦女子や、成績が良いのに悪いふりをする学生などはまだ可愛いものだが、腹黒い自称「お人好し」は計算尽くで他人を利用できる人種だ。そしてカメラマンの業界にも、若輩者には峻別できない真性お人好しと、仮性お人好しとが全く同じ顔をして存在しているのである。

アシスタントを辞められない。無理な仕事を安く請けてしまう。細かい仕事でも念

入りにしてしまう。資機材・感材費が高んでいるのにクライアントには笑顔で接する……。真性お人好したちにとってカメラマン業界とはまさに生き馬の目を抜く修羅場だ。自分という人間が気に入られなければならないのは良く分かっている。だから真性お人好したちは天性の献身性をもってクライアントに尽くそうとする。しかしそのままではただの便利屋で終わってしまう事は誰の目にも明らかだろう。一件の客のいいように使われていては他に対する営業活動が疎かになるし、その現場（会社）の事情しか知らないということになれば他の客に接する際のハタタリも効かなくなる。固定客に対して決まった写真ばかり撮っているということになれば前述した「引き出し」も少ないまま。そうして「いい人」たちは先細り、伸び悩み、（アシスタントを円満に辞められずに消えてゆく者もあり）カメラマンを辞めないまでもビッグネームになることは叶わないのだ。

このように書く「悪い人」（敢えてカギ括弧を付ける）の方が出世するように思われるかも知れない。……否、まさにその通りなのである。ただ誤解されては困るのだが、出世する人たちは皆仮性お人好しなのである。本当に悪さを剥きだしにしたままでは、そしてお人好しに見えなければフリーランスの業界は当然渡っていけないから、出世する人たちは巧妙に、まさしく本人以外には分からないようなやり方で仮性お人好しの仮面を被っているのである。カメラマンたちがふとした瞬間に見せる我の強さ、融通のきかなさ、超個人的性——これらは全てその仮面に収まりきらなかった額なり顎なりの皮膚の部分なのである。

その「収まりきらなかった額なり顎なりの皮膚の部分」の効用について語るにあたり、アシスタントの段階でお人好しぶりを露呈させてしまった私は憶測でしか語る事が出来ない。だからこれについて多くを語る事は避けようと思う。だが少なくとも言える事としては、そう言った面の遅しさこそが人をしてカメラマンにさせるのだという事だ。他人を押しつける力。職業として写真を行ううえでのコスト感覚。お人好しには真似の出来ないシビアさがフリーカメラマンには必要なものである。

いい人を曲げてまでカメラマンになる事はないし、土台無理な話だ。そしてカメラマンになってしまふ人間は「いい人のなり損ない」。どちらを選ぶかは読者の皆様次第だ。冒頭に述べた本の中で、或る「いい人」は喫茶店のマスターになっていた。詳しい経緯までは失念したが、その人が「いい人のなり損ないがカメラマンなんですよ」と言っ

てその章が終わっていたように思う。繰り返しになるが、蓋し名言である。

（七）あとがき

人は誰しも、一度は芸の道で身を立たいと思うものだと私は信じている。例えば、子供たちが卒業文集の中で「将来の夢」の欄に給与生活者としての職業を挙げる事があるだろうか？（「電車の運転手」や「学校の先生」などは別だが）そこに書かれるのはプロサッカー選手であったり、歌手であったり、コレーサー等の職種であることが殆どであろう。かほど左様に人間の遺伝子の中には「自分が」「自分の名前で」「仕事をしたい」という本能が埋め込まれているのだ。そしてそれらを荒唐無稽な子供の戯言と片づけるのはいかにもたやすい事だろう。しかし、三つ子の魂百までという言葉が示すように、その本性はその子供が何歳になっても覆い隠されこそすれ、完全に消え去ってしまふ事はない。この稿の読者は殆どが一〇代後半以上の方々だと思うが、皆さんの最初の夢は一体どのような物であっただろうか。そして今、皆さんは納得せずに今の自分の生活を過ごしておられるだろうか。納得しようがしまいが、青年は然るべき年齢になれば自ら働いて金を稼いで来なければならぬ境遇に陥る。夢だ希望だと言っていられるのはその然るべき年齢に達するまでの限定的な特権なのかも知れない。

そんな中で、人様に憧れられる職業に就く人々はその限定期間内にはいい動き方を出来た人々なのだとは私はこの歳になって思う。私より年上の人々にとっては笑止千万な論だとは承知の上だが、芸の道により深くかかわって行くためには早ければ早いほど良いものだ。もし私が今歌手デビューしたら「遅咲きの……」という接頭辞を付けられるだろうし、三〇歳を過ぎて脱サラカメラマンでもないだろう。私が今後芸の道に進むにしろ進まないにしろ、他人様より出遅れているという事は揺るがせようのない事実である。読者の皆様は今、どのような位置に立たれているだろうか？

夢を果たせなかった（＝大抵の）人間はすべからず心の中に残る梅干しの「仁」のようなものを嘗め、噛みしめ、そして味わいながら死ぬ事も出来ずに生きてゆく。それを甘いノスタルジーと解釈するか、牽かれ者の小唄と聞くか、それは皆様一人一人の自由である。ただ私はその「仁」の味をここにつまびらかにしてきただけなのだ。本稿は「カメラマンにならないためのいくつかの方法」というタイトルではあったが、私はここに

あらゆる「夢」を込めたつもりだ。つまりこの「カメラマン」の部分を「小説家」や「歌手」に置き換えても読めるような文章に仕上がったと自負している。ぜひご愛読願いたい。簡単に叶う願いは夢ではなく、単なる希望にしか過ぎない。叶わないからこそ「夢」と呼べる。

この結びの文句は牽かれ者の小唄か、否か。その判断を皆様にお任せして、この稿を終わりにしたいと思います。

長い間おつき合い戴き、本当に有り難うございました。

二〇〇一年八月五日

若林 茂樹